

「拭えなかつたもの」

○ 梗概

今治タオルの製造方法でハンカチを製造する株式会社丹張。当企業の副社長である今井吉規（30）は、企業の業績を回復するべく、OEM導入を企てていたが、商工会議所との協議の末、失敗に終わった。その結果を父親であり社長である今井竜吾（60）へ伝えると、今井は自身が携わってきたハンカチの製造に對して、今治という土地に對して恨みを感じる様になってしまう。

工場の今後について明確な施策を打ち出せない、かつ打ちひしがれている今井を励ましたいと考えている吉規は、旧友である佐古篤人（30）から、佐古の奥さんであり吉規の旧友でもある佐古莉子（30）が担任を受け持つ生徒達に對して、校外授業を実施し、会社の魅力を知ってもらう機会を設けてみてはどうかと勧めを受ける。

とある日、莉子は30名ばかりの小学1年生を引率して、株式会社丹張へ訪れる。今井

を始め、丹張の従業員達が、実際のハンカチの製造工程を生徒達に見せながら、ものづくりの現状を伝える。

莉子と久しぶりに再会した吉規は、会話の中で、株式会社丹張が葛藤している現状を打ち明ける。だが、莉子からは将来に向けた施策や将来像に囚われるのではなく、過去に感じたモノごとを振り返る事が、切羽詰まっている吉規にとっては大切ではないかとアドバイスをする。

アドバイスをもらった吉規は、会社がなくなる事で生じる拭えなくなるであろうモノを悔いるのでは無く、今まで与えてきたモノ、拭ってきたモノを振り返る事こそが、今自身に、欠けている行為ではないかと自認する。

自身を振り返った吉規は、今治タオルという伝統に今も尚、魅了されていることを拭うことが出来ない事を理解し、社長である今井と共に会社の進む道について話し合う。

○ 登場人物

今井吉規（30） 株式会社丹張の副社長

今井竜吾（60） 株式会社丹張の社長。吉規

の父親

佐古篤人（30） 吉規の旧友

佐古莉子（30） 吉規の旧友。佐古の奥様

佐藤学（24） 株式会社丹張の従業員

小塚みか（7） 莉子の生徒。小学1年生

小学生ア（7） 莉子の生徒。小学1年生

小学生イ（7） 莉子の生徒。小学1年生

小学生ロ（7） 莉子の生徒。小学1年生

従業員ブ 株式会社丹張の従業員

従業員ロ 株式会社丹張の従業員

店員ア 串焼き「灯」の店員

○株式会社丹張・全景（夜）

株式会社丹張と書かれたアルミ看板。

○同・第一工場（夜）

照明の点いていない工場。

暗闇の中でも色鮮やかに映える壁一面のボビン。

工場内には沢山の整経機と織機。

○同・執務室前（夜）

暗闇の廊下で一際目立つ、一つの重厚な扉。

扉には、『執務室』の印字。

○同・執務室（夜）

照明の点いていない室内。

規則正しく並べられた30卓のデスク。小気味よく鳴り響くタイピング音。

壁掛け時計の針は12時を指す。作業着姿の今井吉規（30）、缶コー

ヒ―を飲みながら一人で黙々と作業をしている。

吉規はPCをまじまじと見ながら、20秒に1回のペースで頭を抱える。

机上には吉規のPCと携帯、「OEM導入に関する検討結果」「株式会社今治織維とのM&Aのご提案」と書かれた資料が各1部ずつ置かれている。

机上に置かれた携帯に通知が届く。

吉規、携帯画面を覗き込む。

携帯画面「父：今日の朝礼後いいか？」

吉規、八の字眉をしながら、壁掛け時計を見つめる。

○瀬戸内海（朝）

快晴の青空。

穏やかな瀬戸内海に数隻の船が浮遊している。

○株式会社丹張・駐車場（朝）

駐車場に沢山の車が入庫している。
大半の車のナンバープレートは愛媛ナンバー。
。

始業のチャイムが駐車場に響き渡る。

○同・第一工場（朝）

壁一面には色鮮やかなポビン。

工場内には多様な機器。

糸をクリールに立てる様子。

タイコとよばれる木管に糸を巻き取る様子。
。

木管から柄模様の順に糸を巻く様子。

ジャガード織機で糸を織る様子。

多くの従業員達は真剣な眼差しで整経作業、織り作業を行っている。

工場内の通路を闊歩しながら、様子を
見て回る吉規。

吉規の歩く向かい側から佐藤学（24）
が歩いてくる。

佐藤「副社長、おはようございます」

吉規「おはよう」

吉規は目元に隈を作りながらも、口角を上げ挨拶を返す。

佐藤が吉規の横を通り過ぎるや否や、

吉規の顔から笑顔が消える。

目頭を押さえながら通路を歩く吉規。

吉規の歩く向かい側から今井竜吾（60）が歩いて来る。

向かいから歩いて来る今井の表情は朗らかであり、従業員＼＼に向かって大きな声で挨拶を交わしている。

今井「おはようさん、久しぶりに見た気がするな。息子、元気になっているか？」

従業員＼＼「はい、お陰様で」

今井「そりゃーよかった、今日も頑張ってくれよ」

従業員＼＼「はい、ありがとうございます」

従業員＼＼への挨拶を終え、通路に視線を戻す今井。その後、向かいから歩いて来る吉規の存在に気づく。

吉規、今井に対して軽く会釈をした後、少し俯きながら、歩を進める。
今井、先ほどまでの柔和の表情から一変、真剣な眼差しでコクリと頷き、歩み出す。

吉規と今井、言葉を交わすことなく互いの横を通り過ぎる。

○同・工場脇

ベンチに座っている吉規。

手元には、株式会社丹張のロゴが刺繍されたハンカチ。

吉規、ハンカチを見つめながら、深く白い吐息を吐き出す。

吉規の座っているベンチに向かって、今井が歩いて来る。

吉規、ハンカチをポケットに仕舞う。無言で吉規の横に座る今井。

今井、ベンチに座るや否や胸ポケットからタバコの箱を取り出す。

今井「吸うか？」

タバコを口に喰えながら、吉規にも一本差し出す今井。

吉規「もう辞めたので、大丈夫です」

今井、吉規の返答を聞いた後、タバコの箱を胸ポケットに仕舞い、口元のタバコに火を着ける。

しばらく沈黙の時間が流れる。

吉規、洗面所で顔を洗う様に顔を擦る。

その後、一回深く呼吸をする。

吉規「先日の件の結論が出ました」

勢い良く話し始める吉規。

今井「……OCN だっけか？」

吉規「……違います、OEM です。 Original

Equipment Manufacturer の略です」

今井「OEM、OEM。あれ、OCN は？」

吉規「OCN はおそらく契約している携帯のプランのやつです」

今井「あーそれがOCNか。もうどれが、どれか、よう分からん。どうぞ、続けて」

今井、気に留めず、タバコを吸う。

吉規はすぐに語り始めることはせず、一度唾を飲み込む。

吉規「丹張というブランドはあなたたちが思っている以上に求められていないと」

今井のタバコを吸う手が一度止まるが、すぐに再びタバコを吸い直す。

吉規「丹張にOJZを導入する価値はない。これが商工会議所の結論でした」

吉規、急に気が緩んだのか、発言後、ベンチに深く腰をかける。

今井、タバコを灰皿に擦り付け捨てる。その後、腕を組み、しばらく硬直する。

今井「そうか……。ご苦労」

今井、ベンチから立ち上がり、工場の中へと入っていく。

吉規、ベンチに座りながら、今井の様子を横目で追う。

○株式会社丹張・外（夕）

茜色の空。

終業のチャイムが鳴り響き渡る。

○同・第一工場（夕）

吉規、行き交う従業員と挨拶をする。

従業員「お疲れ様です」

吉規「お疲れ様です」

○同・工場脇（夕）

自販機でホットの缶コーヒーを買う吉規。その後、工場脇のベンチに座る。

吉規、沢山の車が駐車場から出ていく様子をベンチに座りながら、見つめる。

吉規「……2年。……3年。上出来で5年」

吉規は小声で軽やかに呟きながら、缶コーヒーを嗜む。

空は茜色に輝いている。

吉規、首がもげてしまうほどの角度で上空を見上げる。

茜色の空に自販機の購入音が響き渡る。

吉規、自販機の購入音の鳴る方向へと顔を向ける。

吉規が向いた方向から、吉規と同じ缶コーヒーを持った今井が現れる。

今井、吉規を見て少し足を止める。その後、無言で吉規の隣に座る。

吉規、今井が隣に座る様子を横目で確認した後、再び茜色の空を見上げる。

沈黙の時間が流れる。

吉規と今井が座るベンチに若い集団の騒いだ声色が聞こえてくる。

吉規と今井、正門のある方角を同じタイミングで向く。

○同・正門（夕）

中学生集団が下校している様子。

○同・工場脇（夕）

中学生集団の下校様子をまじまじと見つめる吉規と今井。

○同・正門（夕）

元気かつ騒がしい様子の中学生集団。

○同・工場脇（夕）

中学生集団を見つめながら、同じタイミングで缶コーヒーに口をつける吉規と今井。

中学生軍団の声が次第に遠退くのと比例して、今井の背中丸くなる。

○同・正門（夕）

正門から人影がいなくなる。

○同・工場脇（夕）

今井、缶コーヒーを地面に置き、手を膝に当てる。

吉規、缶コーヒーを溢さない様気をつけながら、少し背筋を伸ばす。その後、再び空を見上げる。

吉規「……質問していい？社員としてではな
く」

今井「ん？……なんや？」

今井の視線が吉規の顔へと向く。

吉規「卒様式や上京する時にハンカチを振る
慣わし。あれって本当にあつたの？」

今井「……口を開いたと思えば、そんな事か」

吉規「そんなしょうも無いことでも無いと思
うけど」

今井「確かに昔はやっていたな。わしもフエ
リ―乗り場まで見送り行った時しとつたわ」

吉規「ドラマは誇張表現じゃないと」

今井「そう」

吉規「ちなみになあれってハンカチじゃないと
いけなかったの？」

今井「……それは知らん」

吉規「そりゃ、知る由もないか」

今井「知らんけど、大体の別れの際は泣く
もんやろ？だから、気づいたらみんなハン
カチ持って振ってたんやと思う」

吉規「……親父も例に漏れず、ハンカチを振りながら泣いた？」

今井、胸ポケットからタバコを取り出し、火を着ける。

今井「……大昔のことや。忘れたわい」

吉規「……そりゃーそうか」

上空を見上げ続けている吉規。

今井、タバコの煙を空に向かって吹く。

タバコの煙が茜色の空に滞留する。

今井、タバコの煙を吐き終えた後も、空を見上げている。

今井「わしからも質問いいか？」

吉規「……どうぞ」

今井、上空を見上げながらタバコをひと吸いする。

今井「……この家に生まれて良かったと思っ
ているか？」

吉規、今井の顔を二度見し、失笑する。

吉規「……珍しく自分から口を開いたと思えば、かなりどぎつい質問を」

今井「そうか？」

吉規「そうやで。ちなみにそれは父親としての質問？社長としての質問？」

今井「そんな、難しく考えんでくれ。気楽にな気楽に」

吉規、数秒間俯く。その後、目を瞑りながら再び上空を見上げる。

吉規が上空を見上げた事を真似する様に、今井も上空を見上げる。

吉規、目を瞑りながら、

吉規「俺は……今井家に生まれて良かったと思っっている」

今井、上空を見上げながら、タバコを吸う。

吉規「……ただ、私としては想定外の結末迎えそうだけど」

吉規、引き続き目を瞑っている。

吉規の返答を聞き、今井は上空を見ながらタバコを再度吸う。

そして、先ほどよりもゆつくりとタバ

コの煙を吐き出しながら、

今井「……正直、思うことはある。今治という地に翻弄されたこと、今井家の血筋に固執したことを」

吉規、上空を見上げながら、目を瞑りながら、口角が少し下がる。

今井「皮肉なことだよ。誰かの目元を拭う、思い出を拭う必要性がないと言われた」

吉規「……うん」

吉規、少し声が裏返る。

今井「最終的には、自分の涙を拭うために作っていました。おとぎ話でありそうやな」

今井、ベンチから勢いよく立ち上がる。その後、タバコを火消しし、ポケットからハンカチを取り出そうとする。

今井、ハンカチを取り出す手が止まる。躊躇した後、ハンカチを取り出す事なく、ベンチ前から去って行く。

吉規、今井の足音が完全に聞こえなくなるまで目を瞑る。

数秒後、目をゆっくり開く吉規。

茜色の空。

吉規、手に持った缶コーヒーを勢い良く飲む。

鼻にコーヒーが入り、少し咽せる。

吉規、鼻を嚙りながら上空を見上げる。

吉規「言うかね、そういうこと」

○株式会社丹張・全景

蝉の鳴き声。

株式会社丹張と書かれたアルミ看板。

○同・第一工場

長袖の作業着を着た佐藤、額に大量の汗をかきながら、真剣な眼差しで整経作業を行なっている。

佐藤の元に吉規が歩み寄って来る。

佐藤の作業を少し離れて見守る吉規。

佐藤、作業がひと段落したところで、作業着の袖で汗を拭う。

吉規「今日も暑いね」

吉規、ポケットからハンカチを取り出し、佐藤に渡す。

佐藤、ハンカチを受け取る前に、ハンカチを凝視し、吉規の顔を覗き込む。

佐藤「副社長、それ今日初めて使いますか？」

吉規「いや、さっきトイレ行った時に」

佐藤、口をへの字にして首をゆっくり横に振る。

吉規「ダメ？」

佐藤「ダメですね。あと、自分のあります」

佐藤、自身ポケットからハンカチを取り出す。

○同・工場脇

工場脇のベンチに座っている佐藤。

吉規、ペットボトルの清涼水を2本持ち、そのうちの1本を佐藤に差し出す。

佐藤「ありがとうございます、いただきます」

吉規「いえいえ、どうぞ」

吉規と佐藤、勢い良く清涼水を開封し

飲む。

佐藤「はー、生き返りますね」

吉規「ねえ、やばいね」

吉規と佐藤、再度清涼水を飲む。

吉規、ベンチに深く腰をかけ、佐藤を

横目で見る。

吉規「佐藤君って、何年目だっけ？」

佐藤「今年で7年目です」

吉規「7年。早いねー」

佐藤「一応、副社長よりは先輩ですよ」

吉規「そうでした、失礼しました先輩」

吉規、佐藤に向かって頭を下げる。

佐藤「よして下さい。ノリですよ、ノリ」

吉規と佐藤、互いに微笑む。

佐藤「そうだ。今更なんですけど、副社長に聞いてみたいことがあって」

吉規「何？答えられるかわかんないけど」

佐藤「どうしてうちは、タオルではなくハンカチをメインで製造しているのですか？」

吉規「そんなの、かつこいいからだよ」

吉規、キメ顔を佐藤に見せつける。

佐藤「そんな理由ですか？」

吉規「そんな訳、冗談だよ」

吉規、ペットボトルのキャップを閉め、
地面に置く。

吉規「2代目の時かな？」

佐藤「はい」

吉規「当時うちは他のメーカーと比べて売上が落ちていたんだよ」

佐藤「そうなんですか？」

吉規「うん。海外からの安価品の輸入の影響もあつたけど、何より他のメーカーより知名度が低かつた」

佐藤「うちも一応老舗の一つですけどね」

吉規「うちが生き残る為には、他のメーカーに勝るか、他のメーカーがやっていないことをする必要があつた」

佐藤「なるほど。だから、他のメーカーが製造していない商品に目をつけた結果……」

吉規「そう、ハンカチをメインで製造するに至った。その当時、今治タオルの要領でハンカチを織ることは先行的ではあったから」
佐藤「先人の苦悩のおかげで今の我々があるんですね」

吉規「そうね、一応。我々は細々とはあるが伝統の一端を担っている」

佐藤「なるほど」

吉規「良いものを作るとは世の中に足りないものを供給するため、技術者が身を粉にする事だと、僕は思うかな」

佐藤「メモっていいですか？」

吉規「勿論。てか、何で今更そんな事を？」

佐藤「いや、知ってはいたんですけど、人に伝えるには正しい情報を仕入れた方がいいと思うって」

吉規「ネットとかにも情報転がっているよ」

佐藤「ネットにもですか？」

吉規「それはダメだよ、ちゃんとソースがあるところから引っ張って来ないと」

佐藤「まーとにかく、ちゃんとした人から話聞けたんで、良かったです」

吉規「お役に立てたのなら、何よりです。ちなみに誰にその情報伝えるの？」

佐藤「中学の同級生です」

吉規「へー、なんで？」

佐藤「大学院卒業を機に、今治に帰ってきた
いっていう奴がいて、そいつが詳しく話聞かせてくれたって」

吉規「ふーん、大学院出てまで」

吉規の顔が少し曇る。

佐藤「採用ってなったら副社長が面接するんですよね？」

吉規「そうだね、一応」

佐藤「白木って言うんですけど、採用してあげてくださいいね」

無言な吉規。

佐藤「ちよっと、冗談ですよ。ノリですよ、ノリ」

吉規、表情が一気に明るくなる。

吉規「分かっているよ」

佐藤「まー、熱意はあるタイプなんで、コネとか無くても受かりそうですね」

腕時計をチラッと見る佐藤。

佐藤「じゃー自分戻ります。飲み物ありがとうございます」

去って行く佐藤をベンチに座りながら見送る吉規。

しばらく、ベンチに座りながら固まる吉規。その後、ゆっくりと立ち上がりベンチを後にする。

○今治市・商店街（夜）

ポロシャツを着た佐古篤人（30）が、商店街の通りを歩いている。

佐古、串焼き「灯」と書かれた暖簾の前で止まる。

○串焼き「灯」・中（夜）

暖簾をくぐり抜け、店内へ入店をする

佐古。

店員Aが佐古を接客する。

店員A「いらっしやいませ、何名様ですか？」

佐古「いや、待ち合わせで」

佐古、店内を見渡す。

佐古、ビールを片手に手招きする吉規の姿を見つける。

佐古「あっ、いました」

佐古、店員Aに対して声をかけた後、

吉規の座る卓へと移動する。

佐古「悪い、悪い。遅れた」

吉規「なんで仕事の俺より帰省中のお前の方が遅いんだよ」

佐古「悪い。莉子の親父さんに捕まっ

ていて吉規「ならしょうがないな、あのおじさん話

長いもんな」

佐古「おい、仮にも人の義父だぞ」

吉規「確かに、失礼すぎたわ。とりあえず、何飲む？」

吉規、メニューを佐古に見せる。

佐古「じゃー生で」

吉規「おっけ。すみません！生1つで」

店員「の声」はい、生1丁」

○同・中（夜）

吉規「お久しぶりです、乾杯」

佐古「乾杯」

吉規と佐古、乾杯を交わす。

吉規、ビールをちよびちよび飲む。

佐古、左手薬指の指輪を輝かせながら、

勢い良くビールを飲む。

佐古「はー、これだよ」

吉規「この時期のビールはたまらんなよな」

佐古「間違いない。年々ビールの旨みを感じ

る様になってきている」

吉規「まじ？俺はもう最近日本酒かな」

佐古「確かに、日本酒もええけどな。呑むっ

てなったら何呑むの？」

吉規「まーベタに石鎚かな」

佐古「へー。愛媛では有名なお酒？」

吉規「勿論。あとは、山丹正宗とか梅錦も有名やな」

佐古「名前は聞いたことあるな。飲んでみたいから、後で頼もうよ」

吉規「いいよ、その前にこいつを片さない」と

吉規、自身のビールを勢い良く飲む。

吉規「はー」

どすの利いた声を発する吉規。

佐古「飲むねー」

吉規「飲むよ、飲まなきゃね……」

吉規、少し目が虚になり始めている。

○同・中（夜）

卓上には、刺身の盛り合わせ、枝豆、取り分けられた玉子焼豚丼とおちよこが2個置かれている。

佐古の声「うん、それで」

吉規「悔しいわけよ。良いモノ作っているのに、なんで俺なんだと、なんでうちなんだよと」

佐古「うん」

吉規「要するに、入社以来、初めての未曾有の危機です。そのため、頭の切れる佐古さんにお話を伺おうっていう経緯」

佐古「なるほどな。でも実際、俺は自分で会社をやったことがないから、ヨシの望む答えを出せるかどうか」

枝豆を摘みながら、答える佐古。

吉規「いいよ、信頼のおける人の声を聞けるだけで。それだけで楽になるってもんよ」

佐古、枝豆をガラ入れに入れる。

佐古「いいですよ。こういう話をするのは嫌いじゃないですから」

吉規「助かります」

佐古「まず、聞きたいんだけどさ、本当に持ってあと数年なの？」

吉規「そうね。……ここだけの話、営業キャッシュフローがここ数年ずっとあれだ」

佐古「改善の目処は？コロナ禍の影響も、もうそんな受けていない頃合いだろ？」

吉規「でも、厳しいね。材料費の高騰は落ち
着いてはいるんだけど、売上がもう、右肩」

吉規、自身の左肩を下げる。

吉規「それに加え、技術者が少ない。海外で
安価なモノが作れる。消費者はストーリー
を気にしない。……もううんざりだよ」

佐古「そっか、複雑な話だな」

吉規「もうね、最近ますます世の中が嫌いに
なりつつある。事あるごとに逆風が吹く」

佐古「国内ではそうかもしれないけど、海外
でもそうなの？今治タオルって海外で人気
なイメージあるけど」

吉規「まず前提として、うちはハンカチをメ
インで製造している。海外でハンカチはあ
まり使用されないからね、特に最近は……」

佐古「そうか。でも、めっちゃ調べているじ
ゃん、俺の疑問点にすぐ答えてくれる」

吉規「一応副社長ですから」

佐古「いやいや、そんなに自社を冷静に分析
できている経営者はそんな多くないよ」

吉規「……相変わらず、褒め上手やな」

佐古「お前も人を乗せるのが上手やで。もう、心の中では何をすべきか決まっている癖に」

吉規、少し俯き無言になる。その後、おちよこで日本酒を飲む。

佐古、吉規に続いて日本酒を飲む。

佐古の顔が少し渋くなる。

吉規「……苦手？」

佐古「いや、久しぶりに日本酒飲んだから」

佐古、鼻から息を吐き、日本酒の後味を楽しむ。

佐古「あ、でも後味あんまないな」

吉規「そうね、石鎚は飲みやすい方だと思う」

佐古「いいね、久しぶりの日本酒は」

佐古、おちよこを机の上に置く。

佐古「親父さんはどうなの？」

吉規「最近？最近、実家帰ってないからよく知らないな」

佐古「違うよ、社長としての親父さんだよ」

吉規「あー、……もうね、製造停止間近」

佐古「諦めている感じ」

吉規「そうね、最近は結末が悲しい伝記を描こうとしている。酷いものだよ、貴方が不幸なら、俺も乗じて不幸みたいじゃん」

佐古「でもさ、多くの企業が倒産していく今の時代で、2000年近く会社を守り抜いたことは凄いと思うよ、親父さんもヨシも」

吉規「……俺じゃなかったらと、最近よく考えるけどね」

佐古「いや、俺から見ればよくやっている」

吉規「本当か？」

佐古「保証するよ、本当だ」

吉規「……そんな口が上手い佐古さんには私のセカンドキャリアに関するアドバイスでも、らおうかな」

吉規、佐古のおちよこに日本酒を注ぐ。

佐古「おい、少なめでいいから」

吉規「なんでだよ、俺の酒が飲めないってか」

佐古「泥酔して帰ったら、莉子になんて言われるか」

吉規、笑みを浮かべながら自身のおちよこにも日本酒を注ぐ。

吉規「尻に敷かれてるのが悪いだろ。莉子はまだ教員を？」

佐古「やっているよ。今は1年生を受け持っている」

吉規「いいなー、1年生。何にでもなれる」

佐古「小さくて可愛いからとかじゃなくて？」

吉規「それもあるけど、何より無限大の可能性を秘め、直感的に行動ができることに」

佐古「なんだよ、それ。……あつ、いいこと思いついた」

吉規「ん？莉子への言い訳？」

佐古「違うよ、未来に向けた再建の話だよ」

吉規「再建？再建とは？」

机の上に空のおちよこが2個置かれる。

○株式会社丹張・全景

株式会社丹張と書かれたアルミ看板に桜の花弁が数枚張り付いている。

○同・第一工場

吉規、腕時計をチラチラ見ながら忙しい様子。

工場内にいる多くの従業員も落ち着きがない。

吉規の元に佐藤が小走りで駆け寄って来る。

佐藤「副社長、いらっしやいました」

吉規「はい、今行きます」

吉規、少し息を吐く。

○同・第一工場・外

工場の扉を開け、外に出て来た吉規。

その後、驚愕した表情をする。

吉規の前には30名程の小学1年生。

生徒一同「お世話になります」

声色高く、声を揃える生徒一同。

生徒達の横には引率者である佐古莉子（30）の姿。

莉子「お久しぶりです。教員の佐古です。本

日はよろしくお願いいたします」

莉子、吉規に対して会釈をする。

吉規「こちらこそ、よろしくお願いします」

吉規、莉子に対して会釈を返す。

莉子、生徒達に向かって、

莉子「今日は、こちらにいる今井さんに今治
タオル、ハンカチの作り方を教えてもらい
ます。皆さん、ご挨拶しましょう。せーの」

生徒一同「よろしくお願いします」

再び、声を揃える生徒一同。

吉規「こちらこそ、よろしくお願いします」

吉規、ゆっくりと柔らかい口調で生徒
達に対して返事をする。

今井、工場内から出てきて、生徒達の
前に笑顔で姿を現す。

今井「これは、これは、わざわざ遠くからよ
くぞお越しく下さいました」

莉子「こちらが、社長の今井さんです。皆さ
ん、ご挨拶しましょう、せーの」

生徒一同「よろしくお願いします」

今井「はい、ありがとうございます。まー外に居るのも何なので、早く中に」

今井、工場内へ誘導する。

莉子「じゃーみんな、今井社長について行ってね。あと、走っちゃダメだよ」

生徒一同「はい」

生徒達は、今井の後について行く。

吉規、最後尾に着いて、工場へ入って行く。

○同・第一工場

生徒達が目を輝かせる様子。

生徒達の視線の先には、多様な色のポビン。

今井、手元に自社のハンカチを持ちながら、

今井「これらの糸はこのハンカチを作る材料です。最初は真っ白な糸なんやけど、染めることでこんなにも綺麗な色になるんや」

小学生A「俺、この色好き」

小学生B「俺、あっち」

小学生C「はっ、センスない」

小学生A、小学生B、小学生Cが好みの色のボビンを指差し、白熱している。

今井「はっはっは、みんな元気やな。そうやなーこの中で誕生日近い人いる？」

今井、生徒達に対して挙手を求める。

小学生D「みかちゃんやない？」

小塚みか（7）が目を丸くする。

みか「うち？」

今井、みかと同じ目線になる。

今井「みかちゃん？」

みか「はい」

今井「みかちゃんは何色が好きかな？」

みか「えっと、えっとあのピンク」

みか、ピンクのボビンを指差す。

今井「ピンク？可愛い子はやっぱり可愛い色が好きなんやな。じゃーこの色でハンカチ作ろう、おじさんからのプレゼントや」

莉子「いえいえ、そこまでしてくださいさもなく
ても」

莉子、焦った様子で今井へ断りを入れ
る。

今井「ええねん、元々その予定やったから。

あれやで、莉子ちゃんの分も作ってあげて
もええんやけど、結婚祝い用の」

莉子「結構です、本当に、本当にいいので」
申し訳なさそうな表情をする。

今井「じゃーみんなで見かちゃんのハンカチ
作るか」

生徒一同「はい」

莉子、少し困った表情をしながら吉規
の横へ移動して来る。

吉規、横に来た莉子に対して、小言で
会話を繰り広げる。

吉規「ごめん、予定通りに進められなくて」
莉子「いやいや。ヨシのお父さんがうちの父

親に似て、商人気質なのは知っていたから」
今井の声「みんな、次こっちに移動するで」

生徒一同の声「はい」

吉規と莉子、小学生の後について行く。

吉規と莉子、歩きながら、

吉規「ありがとうね、こんな機会用意してもらって」

莉子「こちらこそ、子ども達にとってもいい機会だから。最初、話を聞いた時はびっくりしたけど」

莉子、工場内をゆっくりと見渡す。

莉子「久しぶりにこの中に入った」

吉規「だよな？何年ぶり？」

莉子「えー、10年とかかな？」

吉規「そんな経つのか？大人になったんだね、俺たちも。ちなみに俺は、昨日ぶり」

莉子「はい、しょうもない」

吉規と莉子、互いに微笑みながら、小学生達の歩くペースに合わせて、ゆっくり歩く。

○同・第一工場

従業員がピンク色の糸をクリールに立てる。
その様子を真剣な眼差しで見る生徒達。
吉規と莉子、生徒達の後ろで作業の様子を見る。

莉子「……綺麗」

吉規「……綺麗やる、職人技できている」

吉規、少し虚な目をしている。

莉子「今はどういう工程？」

吉規「布って無数の糸が平ら、かつ均一な張力で織り込まれて出来ているモノだろ。そのための前準備的なやつ」

莉子「ふーん」

ピンク色の糸をクリールに立てる従業員の様子。

吉規「……にしても本当に綺麗やな、改めて見ると」

莉子「……何見惚れとん、毎日見とるんやろ」
吉規「そうやけど」

○（回想）株式会社丹張・第一工場

タバコを吸いながら、糸を新品のクリールに立てる作業員の様子。

○株式会社丹張・第一工場

吉規、莉子の横で糸をクリールに立てる様子を見続ける。

吉規「昔感じたことを、今でも同じ様に感じ取れるって、中々恵まれていると思ってる」

莉子「……よっぽど好きなんやな、会社が」

吉規「……なぜ？」

莉子「なぜって、漏れているからや。中学の時、美紗子ちゃんに告白する前にみんなにバレていた位、漏れてるわ」

吉規「おい、黒歴史蘇らすなよ」

莉子「それ位分かりやすいんよ、ヨシは」

吉規「いや、まだ、俺会社のこと好きって断言してないし」

莉子「中学生みたいなこと言うやん」

○同・第一工場

木管にピンク色の糸を巻き取る様子。
生徒達、口をあんどりと開けながら、
作業を見る。

従業員㊦「ここで大切なのが、糸を均一に巻
いていく事です。だから……」

従業員㊦、定規を手に持つ。

従業員㊦「この定規で糸をポンポンポンと叩
きながら、同じように巻けているか確認を
していきます」

従業員㊦、定規を使いながら張力の均
一さを計測する。

従業員㊦が作業する様子を横並びで見
る吉規と莉子。

吉規、生徒達の背中に視線を向ける。

吉規、莉子に聞こえない位の小言で、

吉規「この子達もいずれは敵か」

莉子「ん？なんて？」

吉規「ん？なんも」

○同・第一工場

木管から柄模様の順に糸を巻く様子。

生徒達、興奮した様子で作業を見る。

吉規と莉子、横並びになり、作業している様子を見る。

吉規「……さっきの話なんやけどさ」

莉子「ん？あー」

吉規「この子達は、この光景をいつまで覚えてくれているかな？と思って、呟いた」

莉子「そうね、ひとりよりけりかと思うけど」

吉規「せめて、会社名は覚えて帰ってくれりかな？」

莉子「それは一番難しいでしょう。この子達、まだ漢字を習い始めたばかりだから。丹張って多分、4年生位に習うんじゃないかな」

吉規「莉子が丹張という漢字を書かせる課題を出してくれたら、ワンチャン覚えてくれるんじゃない？」

莉子「そんな偏った教育していたら、親御さんから指導が入るわ」

吉規「それもそうか」

吉規と莉子、佐藤の作業に視線を戻す。

莉子、作業の様子を見ながら、

莉子「大人になると横着するようになるよね」

吉規「ん？急にどうした？」

莉子「朝のホームルームでさ、ハンカチ、テ

イツシュ持って来ているかを今でも確認す

るんやけど」

吉規「うん」

莉子「子供には持って来いと強制する癖に、

大人は持って来ないとか使わないとか、そ

ういう傾向あるなーと思って」

吉規「……俺のしていることは将来的に必要な

なくなるということを伝えたい訳？」

莉子「別にそんな辛辣な事言いたい訳じゃない

い。所詮、私たちは瞬間瞬間の駒でしか

いっていう事だけ」

吉規、莉子の顔に視線を向ける。

莉子「たかが知れているよ、私たちの仕事は」

吉規、少し眉を上げる。

吉規「……まー分からんこともないな」

莉子「例えば、教員の表立った仕事は子ども達の瞬間瞬間の成長を助けること」

生徒達、談笑しながらピンク色の糸を巻き取る様子を見つめる。

莉子の声「一年間の任期を終えれば、私の仕事は終わり。彼らは赤の他人になる。引き継ぎ書とかも詳細には作成しない」

吉規の声「ビジネスだったら有り得ないな」
莉子「だけど面白くてね。最近、卒業生がよく会いに来てくれるんだ」

吉規、真剣な眼差しで莉子の話を聞く。
莉子「あの時の言葉とか景色とかモノとか、そういう記憶や、考え方、思い出の品は今も微かに残っていると」

吉規「（微笑みながら）ええ仕事やな」
莉子「そうやね。社会の駒やけど、たった一年の任期でも、残っていると分かるとね」

○同・第一工場

従業員ヤ、ジャガード織機で糸を織る

様子。

莉子の声「忘れられない、残るってなんでな
んだろうってちよつとだけ考えてみたんだ」

吉規の声「うん」

莉子の声「多分、忘れられないとか残るって、
忘れることから生じるモノだと思う」

吉規の声「また、難しいことを」

生徒達、真剣な眼差しで織り作業を見
つめる。

莉子の声「例えば、横着を覚える事で、今ま
で用いていた手法とか手順は次第に忘れて
いってしまう」

吉規の声「そうね、忘却曲線的なやつね」

莉子の声「でも同時に、失った丁寧さ、清廉
さとは一体何かを思い出すきっかけを得る」

吉規「……うちの会社も無くなる事で、美化
されるっていうこと？」

莉子、少し悲しげな表情をする。

莉子「……そこまでは言っていない」

吉規、莉子を少し揶揄う様に、

吉規「……ごめん、冗談だって。続けて」

数秒間、フリーズする莉子。

莉子「……いい事言おうとして迷子になった」

落ち込んだ表情をする莉子。

莉子の表情を見て、微笑む吉規。

吉規「嘘でしょ。良い事途中までは言っていないと思うけど」

莉子「元はと言えば、そっちが落ち込んでいたから、無い頭捻って考えてただけだよ」

吉規「それは、俺が悪かったけどもよ」

莉子「とりあえず、私の中でも模索中」

吉規「そうだね、難しい課題だ」

無言になる吉規と莉子。

その後、再び莉子が小声で吉規に呟く。

莉子「最後に一つだけ。なんでそんな自身の未来を卑下した話ばかり思いつくの？」

吉規「ん？……未来を見通せた方が強いから考えたくなるんだよ。でも、考えれば考えるほど自分達が弱者だと気づいてしまう」

莉子「……私の中で一つだけ自信を持っている答えがあるんだけどさ」

吉規「うん」

莉子「人間は結構、弱いよ」

莉子、少し笑いながら話す。

吉規、莉子の顔を見る。

莉子「こうありたい、こうあるべきとか未来の話も大切だけど、自分が与えて来た、もらったことを振り返るのも生きる上では大事な時間でしょ」

生徒達の輝いた目。

莉子の声「常日頃、べき論とか語っていたら、疲れるわ。だから、私は時々、過去に行つて回復して、現世のあの子達に喝を入れる」

吉規、少し間を置いて、

吉規「俺にもそういう機会が必要だと？」

莉子、自身のポケットを漁り始める。

莉子「側から見たらね。でも、それは自分で考えないと。私はヨシではないから」

莉子、笑みを浮かべながら、ポケット

から使い古した丹張の刺繍がされたハ
ンカチをチラッと吉規に見せつける。

吉規、少し目を見開き、口角が緩む。

莉子「私が過去で手に入れた半永久戦利品。

刺繍なんか無くなって、忘れられないけど
な、私からすれば」

ハンカチをポケットに仕舞う莉子。

吉規、少し俯き、黙り込む。

莉子、吉規の様子を静観した後、肘で

吉規の脇腹を突く。

莉子「……副社長、業務中です。過去に行か
ないで」

吉規「分かっているよ。小学生にウケる言葉
を考えていただけや」

莉子「ふーん、見ものですね」

吉規、少し俯き、目を瞑り、黙り込む。

○同・第一工場・外

工場の外で、整列する生徒達。

生徒達の前に立つ吉規と今井。

今井「じゃー、お伝えした通り、出来上がつたハンカチは後ほど学校に送りますんで」

莉子「ありがとうございます。よろしく願いいたします」

今井「みんな！今日は楽しかったかな？」

小学生に呼びかける今井。

生徒一同「はい」

今井「そりゃーよかった」

今井、莉子に目を配る。

莉子「では皆さん、今からは質問タイムです。社長さんや副社長さんに何か聞きたい事ある人はいますか？」

生徒達は周りの様子を伺う。

小学生Aが口火を切る。

小学生B「いつからこの仕事やってますか？」

今井「この仕事？そうやな、社長は18からしているから、かれこれ40年以上やな」

小学生C「俺の父さん、35歳だから生まれる前から仕事しているってこと？」

今井「そういう事になるな」

小学生㍶「すごい」

小学生㍷「楽しかったですか？」

小学生㍸からの短絡的な質問に一瞬、

固まる今井。

小学生㍹「楽しかったですか？」

質問を繰り返す小学生㍺。

吉規、今井の様子を伺う。

今井「そうやな、楽しいことも楽しくないこともどっちも経験したことあるけど……」

生徒達の無垢な眼差し。

今井、眉間に皺を寄せながら、質問の返答を数秒間考える。

今井の眉間の皺が少し緩む。その後、小学生㍻の目を見ながら、

今井「まだ、……答え出したいくないな」

笑顔で優しく答える、今井。

小学生㍼「……どういうこと？」

小学生㍽、疑問そうに莉子に質問する。
莉子、顔が引き攣りながら、しどろもどろな様子。

小学生「副社長は？」

吉規「ん？僕？」

小学生「うん！」

吉規「そうだね。……僕は、元々は違う会社で働いていて、ハンカチを作り始めたのは、5年前になるかな？」

小学生「前は何をしていたの？」

吉規「前は東京でね、色々な会社のお手伝いをしてたよ」

小学生「どんなお手伝い？」

吉規「例えば、とある会社の社長さんが悩んでいるとするでしょ？」

小学生「うん」

吉規「その時、こうした方がいいんじゃないですか？ってアドバイスするお手伝いかな」

小学生「ふーん」

吉規「そう、まーあまりイメージつかないか」

小学生「それでなんでハンカチ作る会社に来たんですか？」

吉規「理由？……そうね」

生徒達の無垢な目を見つめる吉規。

吉規「色んな理由があるけど……」

生徒達の無垢な目。

その眼の中に、色鮮やかなボビン、糸をクリールに立てる従業員の手元の様子が映る。

吉規の落ち着きを纏った目。

その眼の中に、汗を拭う従業員、管に糸を巻き取る従業員の手元、ジャガード織機で糸を織る様子が映る。

吉規の目は少し潤いを増している。

吉規の声「……そうやな、色んな理由はあるけど」

吉規、清々しい表情をしながら、

吉規「やっぱり綺麗で、かつこよく見えていたからかな」

吉規の視線が生徒達から莉子へ向く。

その後、吉規の視線は今井へ向く。

吉規、今井と目が合う。

数秒間、黙ったまま、視線を外さない

吉規と今井。

吉規、目線を外し、少し息を吐く。

その後、再び、生徒達へ視線を向けながら、

吉規「みんな知っているかな。両立するんよ、綺麗さとかっこよさは」

吉規、目元を拭うことなく、微笑みながら語り出す。

○同・第一工場（夜）

照明の点いていない工場。

暗闇の中でも色鮮やかに映える壁一面のボビン。

工場内には沢山の整経機と織機。

工場内に、靴音を響かせる吉規の足元。

各種機器の電源を点ける吉規の手元。

吉規、工場の隅からパイプ椅子を工場内の通路に持ってくる。

機器が稼働し始める音。その最中、吉規は、パイプ椅子に座る。

機器の稼働音が次第に大きくなる。

吉規、俯きながら目を瞑り、腕組みをしながら、稼働音に耳を澄ませる。

工場の窓から少し、月が覗く。

吉規、窓を眩しそうに見上げる。その後、再度俯きながら目を瞑り、機器の稼働音に、耳を澄ませる。

吉規の口元が次第に震えてくる。

○県道4号線（夜）

真っ直ぐ伸びる海岸線沿いの道路に今

治ナンバーの車が一台停車している。

海岸沿いの堤防の上には、缶コーヒ―を飲みながら、海を見つめる今井の姿。穏やかな波音が響き渡る。

今井のポケットから携帯の通知が鳴る。

今井、ポケットから携帯を取り出す。

今井、携帯画面を覗き込む。

携帯画面「吉規：今日の朝礼後いい？」

○株式会社丹張・第一工場

壁一面には色鮮やかなボビン。

吉規之「伝統に触れることは誇らしかった」

工場内には多様な機器。

吉規之「ただ、伝統に翻弄されることは決して望んではいなかった」

糸をクリールに立てる様子。

吉規之「拭えたもの、拭えきれなかったもの。

果たしてどちらの方が多いのか？」

木管に糸を巻き取る様子。

吉規之「ただ、大事なものは数ではないと思う」

木管から柄模様の順に糸を巻く様子。

吉規之「惹かれる事を覚え、忘れることができず、それを呪縛として捉え無かった私は

幸せ者だ」

ジャガード織機で糸を織る様子。

吉規之「時に幻滅する瞬間もあったが」

○株式会社丹張・第一工場・外

大型トラックが製造した布を荷積みし、

搬出する様子。

吉規「この仕事は形なきモノも生み出し、
そして側に在り続ける存在になり得ると思
います」

大型トラックが敷地から出て行く様子
を見送る吉規と佐藤と従業員。

吉規「あの煌々とした糸から生まれる事を、
忘れないでほしいと私は、考えています」

(了)

○ 参考文献

『今治タオル』（今治地域地場産業振興センター）（<https://izc.or.jp/sangyo-1.html>）

『今治謹製タオルができるまで』（今治謹製）

（<https://www.imabari-kinsei.com/flow/>）